

---

# 雪神と少女

亜月れい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪神と少女

### 【Zコード】

Z9227F

### 【作者名】

亜月れい

### 【あらすじ】

雪神と呼ばれる神様と雪神に好かれた少女。雪神、別名冬神は少女が住む地を守り、雪を降らせる事を仕事とする。降りしきる雪は冬の訪れだけでなく、大切なものも運んで来ていたのかもしれない。雪につけられた足跡は紛れもなく事実を表していた。

## プロローグ

その少女は泣いていた。

先刻まで一緒にいたはずの両親とはぐれてしまったから。真っ白な子猫を見つけ、物珍しくて追いかけていたら、いつの間にかはぐれてしまっていた。

一人で泣いていた。

少女の涙は雪に落ちて、小さな跡を作っていく。

小さな、とても軽い雪を踏む音がした。

「ママー。」

少女は振り替える。

だがそこには母親の姿はなく、透けるような白やの子猫がいた。  
「ねこさん……」

その子猫はさつきから少女が追いかけていた猫だった。  
途中で見失つてしまい、もうどこかに逃げたと思い込んでいた。

「…ねこさんも、一人なの？」

子猫は段々と少女に近づいてくる。

「みつるはね、ママとほぐれちゃった

子猫は少女に擦り寄り小さな声で鳴く。  
少女に泣かないで、と言つていいようだった。

「美鶴」

ひどく落ち着いた声が聞こえた。

まわりを見渡してみても誰一人いない。

氣のせいだと思い、もう一度猫の方に向き直る。

「泣かないで」

少女はぎゅっと抱きしめられていた。

れいわの声と同じ、声の持ち主が少女を抱きしめていた。

いつのまにか少女は泣くのをやめていた。

その人の体温が伝わる。

少女には真っ白でふわふわな髪が見えた。  
とても、心地よい。

「美鶴！」

両親の声が聞こえる。

途端にその温もりは消えてしまい、少女は寂しさに襲われる。

駆けつけてきた両親に抱きしめられ、自分は迷っていたのだと思い出した。

白猫は消えていて、あの人もいなくなっていた。

## 初雪の日

「雪村さあ」

頭上から声が聞こえ、頭を上げる。

残つて作業をしていたようだ、まだ残っていた男子生徒に声をかけられる。

「付き合つてるヤツとかいる?」

突然の質問に驚いて、間を置いてから首を横にふる。心なしか男子生徒の顔色に喜びが見える。

「じゃあ、俺と付き合つてみない?」

「え...」めん

驚きはした。

だが美鶴には何故急に付き合つといふ話になるのか分からぬ、その気持ちの方が大きかった。

肩を落とす男子生徒に、自分は帰る事を告げて美鶴は教室を出る。

普段は夕暮れで赤く染まる廊下が、今日はずいぶんと冷えていて薄暗い。

窓の外を見てみると厚い雲が空をおおっていた。

雨が降るかもしれない、と脳裏に掠めた考えを無視して美鶴は学校を出た。

外は凍えるような寒さだった。

吐く息は白くて、ポケットの中のカイロを握りしめながら家に向かう。

そろそろ初雪の季節だ。

声が美鶴の頭をよぎる。

耳じやなくて頭に直接響くような感覚。

懐かしい？

浮かんだ一つの感情がひつかかる。

なぜかは、分からなけれど

そのまま帰るはずだった、でもなんとななく家の近くにある小さな森に足は向いていた。

道中、美鶴は小さな頃の事を思い出す。

小さな頃はまだ別の地に住んでいて、祖父母の家がある「こじ」には毎年冬になると遊びに来ていた。

今でも覚えている

7歳の冬にこの森で、迷子になつた事。

迷う程複雑な森ではないはずなのに、美鶴は真っ白な子猫を追いかけて迷つた。

そこで忘れられない体験をする。

祖母にそれを話してみたら雪神様に気に入られたんだね、なんて言われたのを覚えている。

「ゆ、き神様？」

そう呟いてみて、何かが脳内ではまつた。  
例えるなら、失ったパズルのピースがぴったりはまるような。

木々が揺れる。

葉がついていない木々。

けれども木の葉のざわめきが聞こえる。

「美鶴」

風に乗つて、また声が聞こえる。

もちろん振り向いても誰もいないのは分かっている。

それでも声が聞こえた方を振り返つてみる。

(やつぱつ、いない……)

もつ一度正面を向いて前を見据える。

足元で小さな鳴き声が聞こえ、同時にくすぐったい感覚がまとわりつぐ。

そこには白い子猫がいた。

「君は……」

勘違いかもしれないけど、昔の子猫に似ている気がする。  
でもあれから10年は経っているのだから、あの白猫の子供だろうか。

美鶴はしゃがみこんで白猫を抱き上げた。ふわふわの毛で、思わず顔がほころぶ。

微かな振動が身体に伝わり美鶴は正気に戻る。  
ポケットに入れたままのケータイが鳴つていた。

「もしもし」

電話は母からだった。

美鶴は抱えていた子猫を下に降ろして通話を続ける。  
子猫はそれでも美鶴の足に擦り寄つてくる。

「分かりました」

そつ母に告げて電話を切った。

美鶴は子猫を見て、話しかける。

「私行かなきや。頼も卑くお母さんとのところへ帰るんだよ」

「めんね、と言いながら子猫の喉を撫でる。

気持ちよさそうに喉を鳴らしているのを見て少し切なくなつた。

美鶴は立ち上がり、家に帰る事にした。

「あ……」

空を見上げて呟く。

いつのまにか雪が降つてきていた。

雪は粉雪で積もらないと分かつてゐるけど、それでも何だか嬉しい。

美鶴は空を見ながら歩き出す。

家に着いてから気付いた。子猫が美鶴のあとをずっと着いて來ていたのを。

美鶴は仕方なく、家に入れてしまつた。

猫アレルギーの者はこの家にいなか大丈夫だらう。

子猫を抱えて、玄関のドアを開ける。

「ただいま

## 白猫の存在

「ただいま戻りました」

美鶴の声が廊下に響く。

声に返答はなく、美鶴の足音だけが聞こえる。  
呼び出したはずの母はどこにいるのやら。

とりあえず母の血添に向かって歩く。もちろん、子猫を抱えたまま。

「お母さん？ 美鶴です」

襖の前で中に入り、あろつ母に声をかける。  
今度はちゃんと返事がかえってきた。

「失礼します」

静かに襖を開けて中に入る。

母は静かな目で美鶴を見ていた。

「お帰りなさい、 美鶴」

そう挨拶をして微笑む美鶴の母、雪村千鶴  
落ち着いた立ち居振る舞いに美しいその姿。  
名家雪村の名に恥じない素晴らしい女性。

「あら、 その猫…」

母は美鶴が抱えている猫に手をやる。その手には優しさが滲んでい

た。

「Iの子、家族がいないみたいなんです」

「懐かれてしまったのね」

母は少し笑い子猫に手を伸ばす。

美鶴は子猫を離し母に預ける。

子猫は母にも擦り寄り、喉を撫でられ氣持ちよさやつこひしてこる。

「飼うの？」

「え…いいんですか？」

思わぬ母の一言。

美鶴には飼うところの発想はなかったから。

「構わないわよ」

そう言って母は柔らかく笑つた。

「あの、話したい事と云つのは

美鶴がそう切り出した瞬間、空気が緊張に包まれた。  
母は子猫を抱きながら美鶴を一瞥した。

「美鶴には、雪村の家の事話していないでしょ？あなたの誕生日、  
明日だったわよね」

明日、12月21日

そういうえば誕生日だ。

自分の誕生日を忘れているなんて、母が覚えているのに。

「雪村の、家？」

美鶴にはその言葉がやけに気になつた。  
何も知らない、と母は言つけれど地元の土地を管理する何十代と続  
いている名家だといふことくらいは知つてゐる。  
それ以上に何を説明するのだろうか、よりによつて誕生日に。

母は静かに頷き再び口を開いた。

「そう。雪村の家についてあなたも知つておく必要がある」

「…分かりました」

美鶴はそう言い、母に静かに頭を垂れて部屋を出た。

「お久しぶりですわ、雪神様」

美鶴の足音が遠退いて行くのを確認した千鶴は白猫に頭を下げた。  
白猫はそれに応えるような目で千鶴を見つめている。

「美鶴はまだ花嫁になるには未熟です。どうか末永きお付き合いを

白猫は返事をするよつとて少々わく鳴いた。

また、こつまにか子猫は美鶴のあとを着いてきていた。

「君はホントこつまにか私のそばにいるね……」

いやあ、と白猫は声を上げる。その声はどこか嬉しそうだった。  
皿窓の襻を開けようとしたら手が止まる。ふと考へが頭をよぎった。

「名前、決めよつか」

美鶴は子猫を抱き上げて、部屋に入った。

「つーん…白、シロ、は単純すぎるかな……」

子猫を降ろして床に座り、覗き込みながら唸る。  
当の子猫は可愛いらしく美鶴の手を舐めている。  
懐かれるのは嬉しい。だがこんなにも懐かれるのはおかしく思つ。  
子猫と知り合つて、まだ1時間もたっていない。  
第一、猫とはきまぐれな生き物だったはずだ。  
生まれつき動物に懐かれやすい体质ではない。  
だとしたら、何故だろ？。

「真っ白…まっしろ……  
まじりでこつか」

思いつつきで決まった名前、子猫は真白とこつかが決まりた。



翌日21日、美鶴は朝から母に呼び出されていた。

学校は休み、普段は離れに住んでいる祖母も朝から母家の居間に集まっていた。

仕事のある父は、たゞがにいなかつたが。

「おはよっ、美鶴」

「おはようござります」

祖母と挨拶を交わした後、母と祖母が座つて、いのとは反対に、向き合つように座る。

それにして、何故祖母までわざわざ田に向く必要があるのだらう。

「… わて」

お茶を一口飲んで母は話しだした。

「昨日も言つたけど、あなたには雪村家の事を知つてもひづわ」

少し空気が重くなつた。

そんな母に押されて、美鶴は黙つて頷く事しかできない。

「まず、美鶴は雪神様を知つてる?」

「… とりあえず、一通りは知つてます」

雪神、別名は冬神。

四季の神として冬を守る神。主に雪を降らせる事を仕事とする。古来よりこの地を守る神でもある。

「その雪神が、何か？」

雪神が何故関係している？

美鶴がそう尋ねると母はゆっくりと頷いた。

「雪村の家は2代に1度、娘を雪神に花嫁として捧げているの」

「はな、嫁？…ですか？」

話しが飛躍しすぎている。

美鶴は自分が呟いたその言葉の意味を理解できなかった。神様と、結婚？

「あなたは今日、17歳になつた。何か特別な力を感じないかしら」

掌を開いて見つめてみる。

目に見えたのはいつもと変わらない自分の手。

「……全然」

そう呟いていた。

特別な力など別に何も感じない。

美鶴のその言葉を聞いた母は小さくため息をついた。

「雪村の娘には雪神の血が流れているの。もちろん私やお祖母様や、  
美鶴、あなたにも流れているわ」

そんな話初耳だ。

今まで普通の人間として生きてきた。  
自分の体に神の血が流れている、いきなりそう聞かされてそうなん  
ですか、なんて信じれるわけがない。

「それは本当?」

どうしても、美鶴は信じる事ができなかつた。

「本当?」

当然、と言つみづな母のその口調からも真実だと分かつた。

突然、母は瞳を伏せる。

見たことのないような悲しみの母の表情だった。

「でも、全く力を感じないとこののは少し困るわね

はじめ、美鶴には意味が分からなかつた。

「神の血をひいている私達は幼い頃から力があつた。でも…血が薄  
れているからか、血と相性が悪いのか…あなたは…」

「力が、出なかつた…ですね」

美鶴がそつと母は悲しそうに頷いた。

「力が現れなければ、雪神の花嫁にはなれないわ。古来より、血を絶やす事は最大の禁忌とされていた」

どくん

心臓が波打つ。

母の言葉に呼応するよつに波打つ。

自分は、何かを知っているんだ。

身体が震える。

緊張か、恐怖か。

慌ただしく廊下を走る音が聞こえる。  
瞬間、勢いよく居間の襖が開いた。

「美鶴つ！！」

襖の近くに白髪で、金の瞳を持つ男がいた。  
よほど急いでいたのか息を切らしている。こんな知り合いはないはず。

「よかつた、美鶴」

柔らかく笑って、美鶴をぎゅっと抱き締める。  
急すぎて、声すら出ない。

「ちよ、ちよっと…！」

やつと状況を理解して美鶴は男を離そつと体を押す。  
だけど美鶴の力では動かなくて、更にきつく抱きしめられる。

「起きたらいなくなつてたから、心配した」

男は言う。

てゆうか本当に誰なんだ。

目線の先では、母と祖母が微笑ましそうに美鶴を見ていた。

「あなた…誰？」

美鶴は声を振り絞つた。

バツと体が離れて肩を掴まれる。

目の前にはひどく驚いたような顔があつた。

「真白」

「えつ？」

美鶴がそう聞き返すと、またふわつと笑う。

「真白。 美鶴がくれた、名前」

嬉々とした表情。

よく通る声で嬉しそうに話す。

「ま、真白ー?」

驚いて思わず声が大きくなる。

男は嬉しそうに頷いた。

「え、ちょっと待つて! 真白ってちっちゃくて真っ白な猫…」

だつたはず。

目の前にいる男、もとい真白をじっと見つめる。

白いふわふわの髪はどこか懐かしく、猫の真白を思わせる。

金色の瞳、そういえば真白の瞳も金だった。

かなりの美形、浮世離れした美形。

顔立ちは青年のようでもその表情には幼さが見える。

「猫は、雪神の仮の姿」

真白は叫ぶ。

雪神、

確かに真白はそう言った。

「そこからは私めが説明致します」

母が真白を見据えて叫ぶ。

その瞳はとても落ち着いていた。

「白猫は雪神様の仮の姿。美鶴、あなたが昨日連れてきた白猫はあなたが嫁入りをする方なの」

唚然とした。開いた口が塞がらない。

真白が神様で結婚相手？

「嘘でしょ…」

いつのまにか猫になつていてる真白。美鶴のひざの上でぐるぐると喉を鳴らしている。

ふと人間の姿になつた真白が頭に浮かぶ。

普通の絵ならば、自分は男に膝枕をしているのではないか。

想像した美鶴は恥ずかしくなり、顔を伏せる。

「美鶴？」

「あ、「めんなさい…」

母に声をかけられて顔を上げる。

心配そうな母。

どうやら美鶴が絶望して顔を伏せたと考えているらしい。

美鶴の返事を聞いて、母は話を続ける。

「ただ、さつきも言つたように力が現れなければ花嫁にはなれない。歴代の娘は17の誕生日までに力が現れないなら一生花嫁にはなれなかつた。でも今はあなたしかいない。だから美鶴、あなたに賭ける事にしたの」

母の瞳は真剣だった。

美鶴に賭けると言つた母、どれほど危機的なのか、今は全身で感じる。

「でも千鶴、問題はこちらにある」

人型になつた真白が美鶴に寄り掛かり、呟く。

真白の入型に免疫がない美鶴は真白を押し返し、離れた。

「真白にも問題が？」

真白の思わぬ一言に美鶴は聞き返していた。  
自分でなく雪神側にも何かあるのだろうか。

美鶴の問いに真白は自嘲気味に笑い、頷いた。

「まず美鶴、君に力はないと千鶴は言つけど僕は違うと思つ。操り方を知らないから力がないように見えるだけだ」

力が表面に現れないのだから、結局は同じだけど

と言つて真白は柔らかい笑みを見せた。

安心して、と言つよ。

ちらりと母を見てみる。

母は大して驚いていないようだった。  
でもその表情には少し安堵が見える。

「僕も、美鶴と同じで、力を上手く操れない」

先刻とは一変し、悲しみが見える真白。

「雪神は代替りをしたら花嫁を迎えることができる。それは雪村の娘の誕生日と同調しているけど」

「私や真白は、まだどちらも未熟で、それができないって事?」

誰に言つてもなく、美鶴は自分の考えをまとめるよつと呟く。

美鶴の言葉に、真白や母は頷いた。

「僕は感情が高ぶったときにしか力が現れない。操ることができるないから雪神としての役目を果たす事ができない」

「役目つて、ちやんと雪を降らせねつて」とへ

真白は頷き、少しの間の後不意に距離を縮めてきて美鶴をじっと見つめる。

「美鶴…」

「…はい」

真白は戸惑い考えるよつに一度、目を逸らす。

美鶴は首を傾げて真白を見る。

「嫌じやない？」

「え…？」

もつ一度真白は美鶴を見て呟いた。

真白の目は不安で揺れていのよつだ。

正直、美鶴はどう答えていいのか分からぬ。

「別に、嫌じやないよ」

美鶴は今の自分の素直な思いを告げていた。  
不安げに揺れていた真白の瞳が丸くなる。

「だつて、真白は私のこと助けてくれた」

母は驚きの表情で美鶴を見つめる。

真白は優しく美鶴を見ていた。

「小さい頃私真白に会つた事あるよね。私泣いてた。真白は私に泣かないでつて言つて抱き締めてくれた」

懐かしさを感じたのは勘違いなんかじゃなかつた。  
10年前、美鶴は真白と出会つていたのだ。  
優しかつた。

抱き締めてくれた腕も、かけてくれた言葉を。

「真白がお母さんとお父さんに私の場所を教えてくれたんでしょう？」

美鶴がそう問うと真白は少し恥ずかしそうに頷いた。  
それを見た美鶴は微笑みを真白に向ける。

「真白だもん。嫌じや、ないよ」

一通りを話しあつた。

美鶴を自室へと返し、居間には千鶴と祖母が残つている。

「美鶴は大丈夫なのでしょうか」

千鶴が祖母に言つ。

心配そうに、瞳を伏せて。

祖母は千鶴を見て口を開いた。

「あの子は雪神に好かれている。きっと、大丈夫よ」

千鶴はその言葉を聞いて、泣きそうになつた。

「ねえ」

自室に戻った後、美鶴は真白と向かい合つていた。  
まだ完全に疑問が消えたわけではない。

「何?」

真白は嬉しそうに返事をする。何がそんなに嬉しいのだろう。

「真白は10年前にも私に会つたよね。でもその時と全然変わつてないよう見える。神様ってやっぱり長生きなの?」

少し間を置いて、真白は答える。

「人の一生なんて、神にとつては一瞬のよう」

真白の纏う雰囲気が変わつた気がした。

口調が堅くなり、真白じゃないような気がする。

「長い命の中血を絶やさないよつ、雪神は何人の花嫁を迎える。当然花嫁は先に死んでしまう。長すぎる命は酷なものだ」

「花嫁って、私だけがなるんじゃないんだ…」

聞こえないように呟く。

少し悲しかった。

考えればよく分かる事なのに。

何だか顔を見れなくてうつむいてしまう。

突然握りしめていた両手をとられ、真白の手が美鶴の手を包む。

「美鶴は僕の1番最初の花嫁。僕は美鶴が大好きだから」

美鶴に語りかける真白は真剣で、でもとても優しい顔をしていた。

## 血ひ力

翌朝、朝早く起きた美鶴は庭に向かつていた。  
早く起きあがて、たまにはと想い掃除をすると決めたのだ。

「寒い……」

十分着込んでいるのに、外の空氣は冷たかった。  
今日はどうして冷え込むのか、雪は降るのか。

「雪を降らせるのは、雪神の仕事なんだよなー……」

なんとなく呟いてみた。

真白なら、なんて昨日言つたけれど寒を言つとまだあまり実感で  
きていない。

現実味がなさずあるから。

「真白、部屋に置いてきちゃった」

まだぼんやりとした頭で考える。

昨日みたいにまた自分を探したりしないだろつか。

「…………うわ」

その時の事を思い出して美鶴は顔を赤くする。  
あの時は驚きすぎて分からなかつたけど、もしかして自分はものす  
ごく恥ずかしい事をしでかしたのではないか。

「やつだよ、お母さんもお婆さんもいたし……」

自分の顔に熱が集まつていくのが分かる。  
美鶴は脱力して地面に座り込んでしまつ。  
白猫ならば平氣だ。

でもどうしても人間型には慣れないと  
いや、慣れちゃいけない。

「そ、そうだよ…私、真白と結婚…」

恥ずかしくなり、その先は言えなかつた。

美鶴は顔を上げる。

今までの考えを振り払つように首を振り、本来の目的である掃除を  
しようとした。立ち上がつた。

庭を掃いて落ち葉を集めめる。

段々と気持ちが落ち着いてきた。

朝日はまだ見えないけど、そんなに苦でもない。  
たまにはこんな朝もいいかもしない。  
毎日は嫌だけど。

「椿の花だ」

「わっ！」

後ろから真白の声がした。  
驚いて簫を落としてしまつ。

振り向いてみると、そこには眠そうに手を擦つてゐる真白がいた。

「ま、真白」

「おはよつ美鶴」

微笑んで挨拶をする。

そんな笑顔で言われたら責める氣を無くしてしまう。

「起きたの？もしかして、私起こしちゃった？」

おずおずと真白に聞く。

昨日も結構遅い時間に起きていた。

実はまだ全然寝足りないんじゃないかと思つてしまつ。

自分のせいに起こしてしまつたなら謝らなければいけないから。

「美鶴と一緒に。たまには早起きしなきゃ」

これはかなり氣を使わせているのではないか。  
でもそんな事、真白の笑顔を前にして言えなかつた。

真白が縁側から降りてきて、美鶴のそばに寄る。  
どこから見つけたのか首にマフラーを巻いていた。  
神様でもやつぱり寒いのだろうか。

「真っ赤だ」

開きかけの椿の花を見て真白は呟く。

「椿、好きなの？」

美鶴がそう尋ねると真白は頷いた。  
どこか、懐かしさつに。

「前は雪が嫌いだった。いつかは溶けて無くなってしまう、真っ白だからすぐに染まる。それってなんだか自分がないみたいだとずつと考えていた」

真白は美鶴に向き直り、語り始める。  
寂しさなどは見えなかつた。

「椿には綺麗な赤という色がある。美鶴は知ってる？椿は花びらから散るのではなくて、萼<sup>がく</sup>ごと落ちるんだ。綺麗なまま、散る。花に憧れるなんておかしいかもしれないけど、昔は本当に羨ましかつた」

「…昔、は？」

美鶴がそう聞くと真白はうん、と頷く。  
今度は優しい笑顔で話す。

「でも気づいた。雪は跡を残すことができる。真っ白なのだって、綺麗だ。意味がないわけじゃない、ちゃんと自分だってある。それに雪は、人を喜ばせる事だつてある」

「私は雪、好きだよ」

美鶴は空を見上げて呟く。

今日もまた、雪雲が空を覆つっていた。  
息を吐くと白くて宙に消えていった。

「僕も今は大好きだ」

返ってきた真白の言葉を聞いて美鶴は微笑む。

居間で朝食を摂った後、自室で猫になつた真白と遊んでいた。

やはりまだ人型には慣れない。

昨日は真白に頼んで猫のまま寝てもらつた。

「猫のままならいい」…

あまり意識しないで呟く。

突然美鶴の視界が曇つた。

「美鶴が望むなら、ずっと猫のままでいるー。」

真白の声が聞こえたと思ったたら、真白が人型に戻っていた。  
距離が、近い。

美鶴は慌ててすごい勢いで真白から離れる。

その行動を見た真白が、泣きそうな顔をしていた。

「「」「めんなさいー！その人型…慣れないだけなの。嫌とかじゃないから」

必死で真白に語りかける。

真白は消え入りそうな声でうん、と頷いた。

「それに少し感情的になつたら戻るって事は、猫のままってそんなに樂じやないんでしょう？」

諭すような口調で言ひ。

真白は口をつぐんでうつむいてしまった。

その姿が可愛くて、つい笑ってしまう。

美鶴は少しだけ真白のそばに寄つてみた。

「えっと…、人型は序々に慣らしていく、から」

「…分かった」

### 満面の笑顔

この笑顔を前にして、だいぶ時間がかかると思つけど、とはさすがに言えなかつた。

何故か真白の笑顔には敵わない。

「私、男の人には免疫がないから…だから慣れないんだと思う。家族にはお父さん以外男の人なんていないし、学校でも男の子の友達なんていらないし…。これからも多分、いっぱい不快な思いさせちゃうけど、ごめんね」

急に真白が美鶴の頭に手を伸ばす。

少しひっくりして目を伏せたど、美鶴は受け入れる。

優しい、割れ物を扱うように控えめで優しい手つき。

顔を上げると、おろおろとしながらも自分の頭を撫でている真白がいた。

その様子がおかしくて美鶴は笑つてしまつ。

「ねえ

再び美鶴は真白に向き直り呟く。

真白は首を傾げて疑問を表している。

「昨日の話もつ一回確認したいの。私に力があるって話、詳しく聞  
きたい」

「僕が知っている範囲でなら、全て話す」

快く頷いた真白。

美鶴は深呼吸をして再度口を開く。

「まず、力のことを教えて。雪村家の娘が持つ力って何？」

「退魔の力だよ」

聞き慣れない言葉、先刻の真白の様に首を傾げる。

「退魔の力は美鶴が僕に『える』ことで、僕は雪神となり美鶴は花嫁  
になれる」

「え？ 力を覚醒させるだけじゃ 駄目なの？」

昨日とは少し話が違う。

美鶴がそう聞くと真白は静かに首を振った。

「力を分け与えることで僕らは本当の花嫁や雪神になる。千鶴は  
ちゃんと説明してなかつたね」

「力つて、どうやって覚醒させたり分け『えたつ』するの？」

「残念だけど、僕にも分からんんだ」

真白は苦笑いしながら言つ。

ため息をひとつ吐いた後、思い出したそつに声をあげた。

「余談だけど、雪神は四季を司る神の一人だつていうのは知ってる？その神は他にも3人いて、それらは四季神と呼ばれている。四季神の心臓は、己が身に取り入れると強大な力を手に入れることができるので、その力を狙う奴らもいるんだ」

「つまり、私が持つその退魔の力つていうのが雪神を守る力つてことなの？」

真白は頷き、笑顔を美鶴に向ける。

「やつぱり美鶴は賢いね。でもそれだけじゃない、美鶴の力を僕が貰えたとき、その力は美鶴も守る事ができる」

「えつ、と…それはどういう意味？」

話の流れでいくと自分が持つ力は雪神を守る力だという。でもその力は、美鶴も守るという真白の言葉の意味が分からなかつた。

「いざれ分かる」

真白は微笑んでそれ以上は教えなかつた。

## 闇夜に一筋の光

不思議な夢を見た。

雪が降つてゐる中、美鶴はただ立ちぬくしてゐる。見覚えがある景色、懐かしいとさえ感じる場所だ。気づくと自分は涙を流してゐた。

泣いてゐるけど美鶴じゃない、誰かが泣いてゐる。自分ではない誰かの記憶の中にいる感覚。どうやら本当に誰かの記憶のようだ。

「あなたに泣かれると、私はどうしていいのか分からない」

そう声をかけられ指で涙を拭われる。

田の前に誰かいるのは確かなのに、肝心なその姿はぼやけて見えない。

「「めんなさい」

口はそう言つた。

美鶴の意思に添わず次々と謝罪の言葉を紡ぐ。本当に見てることしかできない。

「「めんなさい、「めんなさい」「めんなさい」

泣きじやぐの」としかできない。

目の前にいる人は美鶴の腕をとり、優しく抱きしめて耳元で何かを呟いた。

「 つる、…… み…… み…… つる」

ゆさゆせと揺らされていの自分の体。ほんやりと真白の声が聞こえて、ゆっくりと目を開ける。

目を開けて、視界に真白が映った瞬間に美鶴は夢の内容を忘れていた。

「 美鶴、こんなところで寝たら風邪をひく」

真白が心配そうに美鶴を見ている。

また真白に探させてしまった。

顔を傾け、時計を見る。

もう午後の11時になつていた。

こたつで本を読んでいたら寝てしまつたようだ。

立ち上がりうと、体を起こす。

途端に美鶴の脳裏に何かがちらついた。

何かは、分からぬが。

「 美鶴?」

真白の声で我に返る。

心配そうに見つめてくる真白に笑みを返して、部屋に戻るように促した。

その夜美鶴はなかなか寝付けなかつた。  
先ほどまで寝ていたからというのもある。  
美鶴は自分の頭の中にある微かな違和感が気になつて仕方なかつた。

外は随分冷え込んでいて、余計に日が覚めてしまつ。いつそこの環境を活かして考え方をしようと美鶴は庭へ出たのだ。

「また、真白置いてきた……」

気がつけばいつも真白を置いてきている。

でも寝ているだろから、起こすわけにもいかなかつた。

というわけで今回は仕方ない。

美鶴はきれいに整えられた庭を見て思つ。

明かりひとつない場所。

家からの明かりを頼りにすれば、歩けないこともないはずだ。そしてここならば落ち着いて考え方ができるだらう。

美鶴は目を閉じて一回深呼吸をする。

静寂が自分を満たしていくのを感じ取る。

考える、血のことと先刻のこと。

自分に流れている血。

薄いがその中にあるという雪神を守る退魔の力。

四季神の心臓を狙う者、守る者。

正直言つて、疑問が全て消えたわけではない。

納得いかないことや分からないことだけというのが今の本音。何より、自分の存在自体が最も曖昧だと美鶴は思つ。

「調べてみようか」

美鶴は口を開き、また考える。

そうだ、調べればいい。

なぜ今まで思いつかなかつたんだらう。

「美鶴……？」

眠そうな声が聞こえて振り返る。案の定、そこにはふいふいと歩いている真白がいた。

「真白」

真白のもとに駆け寄る。

安堵の笑みを見せる真白を見て美鶴は後悔した。  
また心配させてしまったんだ。

ひんやりとした手が美鶴の頬に添えられ、手が触れた瞬間、切なさ  
がこみ上りてきた。

「『めん、なれ』」

顔を見ることができなくて俯く。  
自然に自分の手を真白の手に重ねていた。

「何故あやまる？僕が勝手に追いかけてきたんだ。一緒に散歩した  
いから」

優しい声だった。

本当に、真白は優しい。

顔を上げて真白を見る。

マフラーに厚い羽織を着ていて、寒さ対策はきっちりしているの  
手はとても冷たい。  
しかもマフラーは今朝と同じものだった。  
本当に一体どこから見つけたのだらう。

「ねえ、そのマフラーって……」

「これ？美鶴の部屋の押入れにあった」

やつぱり。

どこか見覚えがあると思つていた薄いピンクのマフラー。

美鶴が中学の初めの頃使つっていたマフラーだ。

とゆうか問題はそこじやない、何で勝手に人の部屋の押入れを開けているのだ。

と言つてやううとも思つたが誇らしそうとして話す真白を見ていると言つ氣がなくなつた。

「…はあ」

「何を考えていた？」

ため息を吐いた美鶴を見て真白は、急に真剣な面持ちになる。

見透かされてるようだ。

真白に聞いてみようと思い美鶴は口を開く。

「調べてみようつて考えた。雪村の家のことや、なぜこの家は花嫁を捧げるようになったのかとか。私はあまりにも知らなさ過ぎるから」

述べた内容については真白も知らないようで、少し驚いている。その様子から察するに、調べる方法を真白は知らないのだろう。真白から視線を外し、星のない空を見上げた。

「……何か文献とか残つてないのかなあ」

独り言のように呟く。

するとその言葉に真白が意外な返答をしてきた。

「書物の場所なら知っている」

真白の言葉を聞いた美鶴はすぐに真白を見る。

「それ、どこにあるの？」

「美鶴が昨日訪れた森の最奥に、古い社があるんだ。確かにここに書物があつたはず」

「それだ」

美鶴は小さく、しかし力強く言った。

不意に頭上から僅かな光が差す。

雲に隠されていた月が姿を現し、またすぐ雲に覆われる。

その光に美鶴は何故か希望を見出していた。

翌日、当然ながら平日の今日、美鶴は学校に行かなければいけない。真白が寝ている間に朝食を済ませて家を出ようとと思っていた、が。

「あ、美鶴。おはよー」

朝食を摂った後、着替えようと畳室に戻ると真白が布団を置んでいた。

失敗だ。その姿を見た直後に美鶴は悟る。

「今日も早いんだね、早速調べに行く？」

真白にこれから事を教えなければいけないと思つと気が重くなる。  
小さくため息をついて話はじめた。

「あのね真白」

「ん？」

どこか楽しそうに返事をして布団を押入れにしまつ。  
そんな後姿を見ているとますます気が重くなつた。

布団をしまい終わつた真白は、正座をする美鶴と向かい合つ。

「私ね、これから学校いかなきゃいけないの

「……そつか……」

真白の元気がなくなつたのが目に見えて分かる。

悪いことは何もしていないので美鶴に罪悪感が芽生えていた。

俯いて何も言わなくなつた真白があまりにも可哀想に見えて美鶴は慌てて話す。

「な、なるべく早く帰つてくるからーその後、一緒に探しにいこう  
?ね?」

必死になつて語りかけると真白は静かに頷いた。

少し心配はあるが美鶴には時間がない。  
急いで着替えて家を出た。



## 護る者、守られる物

今朝交わした約束の通り、美鶴は急いでいた。  
本当はもう少し早く帰らうと思っていたが、通常より担任の話が長  
かつたので焦つている。

真白のことだから怒りはしないと思つ。  
でも寂しがりはする、そう思つて急いでいた。  
今日、寒さこそ残つたが空は晴れ渡つていて雲ひとつない。  
仕事は休みなのかな、と美鶴は空を見ながら思つ。  
角を曲がり門前にたどり着く。

息を整えながら、玄関に向かつて歩いて歩いていった。

「ただいま」

玄関の扉を開けて、美鶴は言つ。  
中は相変わらず静まり返つていた。  
真つ先に自室を手指す。  
口の当たるとじろりと氣持ちよさそうに寝ている真白の姿が頭に浮か  
ぶ。  
だが襖を開けると、そこにはいなかつた。

「……真白？」

名を呼んでみても返事はない。  
姿が見えないのでから当然だつ。  
といつあえず、鞄やコートを置いて真白を探そつと部屋を後にした。

美鶴の足音が響く。

足音以外、物音一つしない家の中。

たつた半日一緒にいなかつただけなのに、美鶴は何か物足りなさを感じていた。

居間の前に来た美鶴は立ち止まつた。

何故か分かる。

真白はこの部屋にいる。

そつと襖を開ける。

そこにはこたつで縮こまつて寝ている真白がいた。

微笑ましくて、音をたてないよう近寄っていく。

真白の頬にきらりと光る何かが見えて足を止め、真白を凝視する。よく見ると真白は泣いていた。

眠っているのは確かだ。涙が頬筋をつたつて流れていった。

「真白……？」

美鶴は近寄れなかつた。

後ろから糸で繫がれているように、一步も前へ進むことができなかつた。

「…………や、ま」

小さく真白が何かを呟く。

その呟きを聞いた瞬間、美鶴を繫ぐ糸が切れ、足は一直線に真白へと向かつていた。

「どうしたの、苦しい？」

そばに座つて真白の涙を拭う。

その顔は、苦悶の表情を浮かべてゐる。一体どんな悪夢を見ているのか。

「か……あ、さま」

再度、真白が呟く。

とても小さいけど確かに母様と言つた。  
そして真白は目が覚めたのか、薄く瞼を開いて虚ろに宙を見つめて  
いた

「大丈夫？ 私だよ、分かるでしょ？」

美鶴は空いている真白の手に触れる。  
すると存在を確かめるように強く握り返してきた。  
変わらず冷たい手は、心の陰の部分を表しているようで離せない。  
瞳が美鶴を捉えてじつと見つめられる。

「うなされてたよ。ねえ、大丈夫？」

息があがっている真白を落ち着かせようと美鶴は声をかける。  
美鶴を見ている瞳は、奥底で不安と恐れに揺れて、とてもじゃなけ  
ど放つておける状態ではない。

「いか……ない、で」

懇願する声。

一体、何をそこまで恐れているのだろう。  
ふと美鶴は気づく。

真白が見つめているのは、美鶴ではない。  
彼女を誰かと重ね合わせているようにも思える。

「私は、どこにもいかないから」

どこにも行かない。

美鶴はその言葉を強く心に刻む。

「だから、おやすみ」

美鶴はそう言って強く手を握る。

真白は安心したように、弱く笑つてもう一度目を閉じた。  
何故だらう。

先刻の真白は普段、美鶴には明かさない心を晒していたように見えた。

彼はその身の内に何を秘めているのだろう。  
誰を自分に重ね合わせていたのか。

どんな夢を見ていて、何に恐れていたのか。

母様は、母親は。

昔、何があったのか。

期を見て話してもらおうと思いつい、美鶴はため息をついた。

数分後、真白は目を覚ました。

心配そうに自分を見る美鶴を見て、彼は首を傾げる。

「おかえり美鶴。どうしたの？」

真白は自分が泣いていたことが分からぬようだ。

言わないほうがいいと思って美鶴は黙る。

でも夢のことを聞こうと思つて、話し始めた。

「ねえ、うなされてたみたいだけど、何の夢を見ていたの？」

真白は俯いてしまう。

僅かに見えた顔は泣きやつなのを堪えていた。見えた。

「話を聞く」としかできないけど、話すだけで楽になることだつてあるよ」

辛そうな真白なんて見たくない。

少しでも力になりたくて、美鶴の口は勝手にしゃがんでいた。

真白は顔を上げて美鶴を見る。

その顔は微笑んでいた。

優しい微笑みのはず、なのにどこか悲しさが見え隠れしている。

そして美鶴を心配させまいとつくつた笑みのようだ。

美鶴は、自分と真白の間に壁があるように感じた。

そんな笑顔なんて、望んでいない。

「『めん……』

美鶴が謝ると今度は純粋に不思議がるような表情になつた。

「何故、美鶴が謝る？」

今度は美鶴が俯く。

とにかく笑顔を真白に強要したことを見たかった。

「謝るのは僕のほうだ。昔の夢を見ていた。でも内容は美鶴には話せない」

「どうして……」

真白を責めようとは思っていない。

でも自然に責めるような口調になつてしまつ。

「どうしても話せない。」れば、僕の問題

優しい拒絕だった。

どこまでも自分を気遣つて居る真白から、引き離されてしまうのが悲しかった。

それでも美鶴は受け入れることにした。

「……分かった」

「でも…………、美鶴に話しておきたい」とはある

そう言って急に真白が複雑な顔を見せて、口籠る。  
言ことにくやうだと、傍から見ても分かる。

「どうしたの？」

美鶴がそう聞くと真白は悪い思いでも振り払つよう、首を振つて  
美鶴を見据える。

ひとつ、ため息をしておもむろに話しが始める。

「前にも話したと思う。雪神を狙つ者がいるところ話、ひとつ大切な事を言つていなかつた」

そこまで言つて、真白はまた口籠つた。

そんなに話しあいことなのか。

美鶴はまた思つ。

自分は真白に無理に話させようとしているのじやないか。

「話しあいのなら、無理に話さなくてこよ

その言葉を聞いた真白は静かに首を横に振る。  
美鶴を捉える瞳は強い意志を宿していた。

「雪神が力を宿すと、邪神や餓鬼などという存在が心臓を奪うこと  
など不可能になる。それならば、力の継承を阻止すればいいと思つ  
奴らがいるんだ。だから、これからは美鶴を狙う者が出てくるだろ  
う」

狙われる。

その言葉に胸が波立つ。

美鶴の血に刻まれた記憶が警鐘を鳴らしている。  
この話、聞かなくても分かる気がした。

「注意してほしい。僕はずつとそばにいるわけにはいかないから、  
たとえそばにいるとしても僕には美鶴を守るだけの力はない」

切実だった。

真白の思いはその目を見れば分かる。

恐れ、憂い、屈辱感。

いろいろな思いが混ざっていた。

「でも」

小さく真白が呟く。

「美鶴は絶対に、たとえ僕が死んでも守るから」

そう言って笑う。  
嫌だった。

真白のその笑顔には距離を感じて。

自分が死んでもいいなんて言い方が嫌だつた。

「なんで……なんで、そんな風に言つて。なんで笑えるの」

「氣づくと美鶴はそう言つていた。

悲しみ、怒り、いろいろな思いが混ざつて今の美鶴を満たしていた。

「簡単に、死んでもいいなんて言わないで」

「真白は美鶴にとつて唯一無一の存在、なのに。  
それが分かつてもらえていなくて、悲しかつた。

「自分のこと、命が軽い存在だなんて思わないで」

泣きそうになり、震える声を必死で抑えて言つ。  
真白はどんな思いで自分を守ると言つたのか。  
自分の思いを分かつてくれただろうか。  
美鶴には、分からぬ。

「元々、出来損ないのこの身。美鶴を護るために、喜んで捨てる」

「やめてよー」

美鶴は声を荒げて言つ。

どうして分かつてくれないので、悲しくて腹立たしかつた。  
自嘲的な笑いを見せる真白を見て、それでも自分を護ると言つた言葉を聞いて、美鶴の涙が頬を伝つた。

「私の血が護るのは、物じやない！ちゃんと心が通つた、真白。あ

なたを護るんでしょう……。だから、そんなこと言わないでよ……」

言い終わって、堪えられなくなり嗚咽する美鶴。

畳の上に跡をつくる涙を見ながら、泣き崩れた。

熱を持つ美鶴の頬に、冷たい指が這う。

その指が流れる涙をぬぐってくれた。

言わずとも分かる。真白の指。

「………… 美鶴は、よく泣く」

柔らかい声。

小さくても、透き通るような声。

「多くの神々は自分の子孫を残してくれる娘を大切に護る。たとえ力がなくとも、必死で護るんだ」

ゆっくりと話をする。

その声は泣いている赤子をなだめるような声だった。

「雪神も例外ではない。だから、僕も本能で美鶴を護る。昔、本当に小さじこじただけど母様に言われたことがある」

母様。

その言葉を聞いて美鶴はハツとする。

いつのまにか涙は止まっていて、美鶴はじっと真白を見つめていた。懐かしそうな顔をして話す真白はとても優しい。

「あなたはきっと将来、深い愛情を持って花嫁と接する。だからその都度の花嫁を大切にしなさいって、母様は言った」

美鶴の一滴の涙を拭つて、髪を指すべく。  
大切に、愛おしそうに触れる。

「頼りないけど、美鶴は必ず護る」

決意に満ちた瞳だった。

あまりにも純粋に向けられる真白からの思い。  
美鶴もただ受けけるだけは嫌だった。

「じゃあ、私も真白を護るから。だから、もうあんなこと言わない  
で」

ちゃんと理解してくれたのか。

それは分からぬけど、先刻の真白の話や今の言葉に頷く姿を見て、  
今はそれでいいと美鶴は思つた。

真白についてもまだ分からぬことがたくさんある。  
甘えただつたり、急に引き離すようなことを言つたり。  
何を恐れ、何から抗い、何を秘めているのか。  
真白の心にある陰を知りたいと思つ反面、真白は許してはくれない  
だらうという想い。

何より、真白の母親の事を知りたい。  
本当に知らないことがたくさんあると分かつたら、でもないことはひ  
とつだ。

「真白」

じつと真白を見つめる。

真白も美鶴の思いを読み取るよつて、見つめ返す。

「社に、行こう」

美鶴がそう言うと、快く頷いて立ち上がった。  
真白には薄いピンクのマフラーを渡して。  
美鶴は部屋からとつてきたコートを羽織り、一人は玄関に向かつた。

## 花嫁と兎

先程の晴天とは一変して、空は雪雲に覆われている。

社へ向かう道中、美鶴と真白は無言だった。

家の事もあって、二人の間には気まずい空気が流れていた。

落ち葉を踏んで、歩いていく。

風が一人の間を吹き抜けていき、更に距離を広げたような気がした。随分な距離を歩いているような気がするけど、目的の社はまだ見えない。

途中からこの森の奥へと進む道は、道なき道となっている。どつりで今まで美鶴が社の存在に気が付かなかつたわけだ。

「疲れた……」

体力は人並み以下だと自覚している。

日頃運動などと滅多にしない美鶴は、真白のペースについていくのが辛くなってきた。

不意に美鶴の3歩先を歩く真白が振り返る。

息が上がっている美鶴を見て、近づいてきた。

「疲れた？」

美鶴は首を縦に2回振つて訴える。

すると真白はうーんと唸つて美鶴に背を向け跪く。

「よし、乗つて！」

突然の真白の行動に驚き、美鶴は目を丸くする。

そしてその行動の意味を理解するのに少々時間を要した。

「だ、だめだよー。」

「何故?」

真白にそう問われ、言葉につまる。

「何でつて……は、恥ずかしい、し……」

美鶴は頬を紅潮させ、次第に声が小さくなつた。  
元々から小柄な美鶴が真白には更に小さく見えた。

「恥ずかしがる必要などない、美鶴が困つているのなら助けるのは  
当然だ」

さも当たり前、といつよつな真白の態度に狼狽える。  
美鶴は、真白を直視できなくなり田を背けた。

不意にどこからか、微かな足音が聞こえた。  
さく、と落ち葉を踏む音が前から段々と近づいてきている。  
顔を上げて前を見ると、琥珀色の長髪を一つに束ねている県田麗し  
い少年がじつとこちらを見ていた。

「真白、ねえ……」

いつのまにかそばにいた真白に声をかけて確認する。  
真白が少年を見る目は探るような目だった。

少年は真白の姿を見た途端に跪き、言った。

「我が主、お久しぶりで」わこます。予定よりあまりにも遅いので、

お迎えにあがりました

その言葉を聞いた真白が一目散に少年の元へと駆け寄る。

その少年、先程は気付かなかつたが、目は燃えるよつた赤だつた。

「すまない、少し用事ができて遅れた」

真白がその少年を見るには優しかつた。  
そして美鶴は一人、置いていかれているよつで寂しく感じる。

「あの……、あなたは？」

おずおずと美鶴は少年に問いかける。

少年ははつとして、今度は美鶴に跪く。

「失礼、花嫁様。紹介が遅れました。私は代々雪神様に仕える白鬼  
の家系の者です。鏡とお呼びください」

鏡と名乗つた少年は恭しく頭を垂れる。

美鶴はそのかしこまつた態度にまた狼狽えた。

「えつ……と。私は、雪村美鶴」

鏡は顔を上げて、美鶴をじつと見つめる。

その赤い瞳は嬉々としていて、少しばかり表情も柔らかい。

「存じております美鶴様。あなた様に会えるのを、楽しみにしておりました」

そう言う鏡の表情は少年そのもので、本当に嬉しく思つてくれてい

るのだと云わる。

鏡の話では、自分と美鶴を手伝つよう眞白に言われたとのことだつた。

「白兎の家についてはまた後程お話し致します。主、私だけでは力不足かと思い社にはもう一人待たせてあります」

「そうか。本当にありがとうございます。感謝している。鏡」

眞白がそう礼を言つと鏡は少し頬を赤くして俯いた。

「い、いやらです」

照れているようだ。

それでも美鶴達を案内する鏡は先陣を切つて歩き出した。

それから5分程歩いていくと視界が晴れた。

薄暗い森を抜けたそこは、清廉な空氣で満ちていた。  
社が、その空氣を造り出しているかのようだ。  
自分などが、易々と近づいていいものなのか。  
美鶴はそう躊躇して立ち止まる。

「……どうかされましたか？」

立ち止まる美鶴を不思議に思い、鏡が声をかける。  
少し間をおいて、美鶴は鏡に言つた。

「いは、私なんかが立ち入つていい場所じゃない」

小さな声だつたけれど、鏡には届いていたようだ。

美鶴の言葉を聞いた鏡は驚いた顔をした後、少し笑つた。

「「」自分を卑下なさらないでください。あなた様は神の血をひいているんですよ、雪神様の血を。立ち入れないわけないじゃないですか」

それでも、美鶴が戸惑つていると田の前にすつと手が差し伸べられた。

「行こいつ」

差し伸べられた手は、真白のもので、美鶴が見上げると笑っていた。美鶴はゆっくりとその手に自分の手を重ね、歩き出した。

ゆっくりと、美鶴は歩く。

真白は美鶴のペースに合わせて歩いていく。

「……あ

急に真白が前方を見据えて咳ぐ。

その視線の先を辿つてみると、一人の少女が社の階段に座つていた。鏡と同じ髪の色。

その髪は長さこそ鏡と同じものの、結んではおりず、ふわふわとしたウェーブがかかっていた。

そして鏡と同じ赤い瞳を持つている。

「あつ、主!」

その少女は真白を見ると、す「」に速さで駆け寄ってきた。

「お久しぶりですー！覚えてますよね？ね？」

そして少女は凄い勢いで真白に詰め寄る。  
真白が気圧されているのを初めて見た。  
それほどまでに少女の威力はすごかつた。

「つ、椎……」

やつと真白が声を発した。

すぐさま鏡がやってきて、少女と真白を引き離す。

「椎、花嫁様の前だ。少しは控えり」

椎と呼ばれた少女は、鏡の言葉を聞いて、そばにいた美鶴を好奇の目でじっと見つめる。

その日の輝きはとても眩しかった。

「美鶴様ですよねーわーーあたし、会えるの楽しみにしてたんですねー！」

椎は美鶴の手を取つて振り回す。  
真白が気圧されるわけが分かった。

「お綺麗ですねえー。小さい頃から主がご執心になるわけが分かりますー！」

「つ、椎！」

真白が声をあげて椎の口をふさぐ。

でもそれは一足遅かつた。

「え……と」

褒められただけでも恥ずかしいのに。美鶴は椎の言葉を理解して頬を赤くする。

そばでは鏡がため息をついた。

「申し訳ありません、美鶴様。椎に悪気はないのですが……」

「い、いや別に、いいよそんな謝らなくても」

謝られるともつと恥ずかしくなる。

無邪気に笑う椎を面白も責められないようだ。

「あ、申し遅れました。あたしは白兎の家のもので鏡とは双子になります。椎とお呼びください」

そう言って鏡と同じように頭を垂れる。

顔を上げると、椎は小さな微笑みを浮かべていた。

さながらその姿は美少女そのもので、女の美鶴も目を奪われる程だった。

「先程申しておつました、白兎の家についてお話致します」

鏡がそう言うと椎は美鶴のそばで話し始めた。

「白兎、雪兎とも言われてるんですが、あたし達の家は、代々雪神様とその花嫁様の、側近となる家なんです」

「私は人間ではありません、今は人の姿をとつておりますが、本  
来はその名の通り兎なのです」

そう言つて急に当たりが煙に包まれた。

その煙が晴れた向こうには2羽の兎がいた。

長い耳、赤い瞳を持つその2羽は言わずと知れた鏡と椎。

「お分かりになりましたでしょうか」

兎の姿のまま話す鏡。

真白と違つて話すことができるらしい。

そつして2羽は元の大型に戻る。

「では、行きましょう」

鏡のその言葉に皆、社の中へと入つていく。

扉を引くと、木特有の音をたてて開いた。

薄暗いそこは随分と埃っぽく長年使われていないことが分かる。

美鶴が少し咳き込むと、真白が心配そうな目を向けてきた。

美鶴は大丈夫、と言だけ言う。

「ここは、表向きは社となつておりますが、その奥にはこの地の歴史や、雪神様についての極秘の書物が置いてあります」

椎が一つの書物を手にとつて言つ。

それも埃かぶつていて払いながら説明する。

「もちろん、雪村家についての書物もあります」

そう言われ、まわりを見渡してみる。

例えるなら、学校の教室くらいの広さだらうか。  
そこには膨大な量の書物があった。

「すごい量……」

美鶴は呟く。

この量を田の前にしてそういう言わずにいれなかつた。

「だから、私達もお手伝い致します」

そう言って鏡は笑う。

その笑顔はとても活き活きとしていた。

「では、始めよ!」

真白のその一言で皆それぞれ別に動きだした。

「暗いなあ……」

奥に行こうとするけど中々進むことができない。

足元に散らばる書物が美鶴の進路を邪魔する。

そして、美鶴の体には先程から異変があり、それも邪魔していた。

「頭、いたい……」

頭痛が治まらない。

鼓動とともに痛みが美鶴を襲う。

美鶴に流れる血が、昔に触れる事を拒んでいるのかもしれない。

「う、あ」

痛みは増していく。

強烈な目眩がして、体を支えようと近くの棚に手を伸ばす。その棚にあった、一つの書物に指が触れた途端、ぞくん、と心臓が大きく波打つた。

「これ……」

書物を手に取ると不思議と徐々に痛みがひいていく。

表紙をじっと見ると雪神と娘、という字が刻まれていた。

1ページずつ捲っていく美鶴は、まるで誰かに操られているようだつた。

『交わした契約により雪村の家は娘を捧げることとなつた』

「違ひ

この部分ではない。

誰かが告げる。

そして、美鶴のページを捲っていく手が止まつた。

『古来より、雪神はこの地を守ってきた神である。四季神の一柱であり、雪を降らせることを仕事とする』

見覚えのある文に見入る。そしてまだ文には続きがある。

『雪神は、他の四季神とは違ひ男しかおらず、血を繋ぐために入間の娘を花嫁とする事を決めた。後に他の四季神も、花嫁を迎えることとなる。雪神の花嫁に選ばれた娘。その娘の姓は、雪村』

「いた……」

頭痛がぶりかえしてきた。

そこから先を知る事を拒むように。

再び眩暈がする。

先程とは比べものにならないくらい強烈だった。

美鶴はその場に倒れこみ、意識を手放していく。

## 白銀の世界

美鶴はゆっくりと意識を取り戻していく。

目を開けると視界には見慣れた天井、それに真白と椎の心配そつな顔があつた。

「起きたか」

「美鶴様？」

はつきりとしない意識で記憶を辿る。

美鶴は、社へ行きそこで何かを調べていたはずだ。

窓の外を見ると、もう暗くなつていて結構な時間が経つていた。今いるのは自分の部屋で、帰ってきた記憶はない。一体、どういうことだらうか。

「いきなり倒れて驚いた。どこか打つてないか？」

上体を起こそうとして真白に支えられる。

そしてその言葉を聞いてやつと思い出した。

「私、倒れたんだ……」

「鏡が今、水を取りにいっています。気分は如何ですか？優れな  
いようなら、横になつていてください」

「大丈夫」

椎に向けて言うと、でもと引き下がる。

美鶴は椎に微笑みかけて、ありがと「うん」、椎は口をつぐんでしまった。

静かに襖が開いて鏡が入ってくる。

その手に湯呑を持つて、美鶴を見た途端安堵の笑みが零れた。

「よかつた、お気づきになられたんですね」

美鶴の元に寄つて来て、湯呑を差し出す。

中からは湯気があがつていた。

「暖かいものの方がよろしいかと。緑茶を淹れてみました」

緑茶を受け取つて一口。

温かみが広がつて、少し落ち着く。

そして自然に謝罪の言葉を紡ぐ。

「迷惑かけて、『めんなさい。折角みんな調べようつて言つてくれたのに……』

美鶴が呟くと、皆一様に気抜けた顔になる。

何か変なことを言つただろうかと美鶴は狼狽えた。

「確かに、心配はしましたよ」

椎が笑いながら言つ。

「でも、あなた様が仰つたことについて謝る必要などありません。  
迷惑などと、思つわけないじゃないですか」

困つたような笑顔を見せながら鏡が言つ。

椎と鏡、2人は顔を見合させて笑つた。

「でも、手間をとらせたんだから謝らなきや」

「いっぱい迷惑かけていいんです！そしてあたしたちをたーくさん頼つてください」

そう言つて満面の笑みを見せる椎。

今度は美鶴が啞然とする。

いきなり後ろから、真白に肩を抱き寄せられて呟く。

「忘れないで。僕のことも頼りにしてほしい」

それは純粹な切なる願い。

美鶴は顔に熱が集まるのを止められなかつた。

「真白？」

呼びかけると回された真白の腕が微かに震える。

そして一層強く抱きしめられる。

するがるように、美鶴を求める。

まるで真白は何かに怯えるようだつた。

今日は、真白がおかしい。

「ねえ……」

美鶴がやつとつと真白は我にかえつて素早く離れる。

「すまない」

田を合わせずに、真白は言った。

皆でお茶をすすりながら、やっと本題に入る。

社で調べたこと、美鶴も覚えていいる限りを話してみることにした。

「誰かに操られてるようだつた

そういうと、皆一様に固まる。

詳しく述べなくては変に誤解されたままになるため、美鶴はゆっくりと話し始める。

「よく分からぬけど、社に入つて少しした時から頭痛がひどかつた。そこからは、あまり覚えてない……でもある本に触れた途端に、私の記憶の中、血に宿つてゐるっていうのかな。それが私に語りかけてきて、操つていた。本にはね、契約がなんとかつて……」

あやふやな記憶がとても憎かつた。

悔しいけど、それしか覚えていないのだ。

「『めん、何か大切な部分を忘れてるつていつのは分かる。でも思い出せないよ』

「それは、少なからずお前の先祖に関係しているかもしねない

小さく真白が呟く。

その言葉を聞いた3人は、一斉に真白を見やる。

「確証はない。でも、僕にはそつ思えて仕方がないんだ」

「それつて要するに、美鶴様には『先祖様の記憶があるつてこと

すか？」

椎の言葉に真白は曖昧に頷く。

2人共混乱しているようだつた。

「少し、その話は置いておきましょ。私からも報告したいことが

混乱を解消するように、鏡が遠慮がちに口を開く。

考え込んでいた真白と椎はその言葉を聞いて鏡の話に耳を傾ける。

「雪神の他に、四季神がおられるのは知っておりますね？その四季神と花嫁は、定期的に集まって情報交換をしているのです。邪神やその他についてなど、情報はとても大切ですから」

「……知らなかつた」

「だと思つました。主も千鶴様も、必要なことしかお話しませんからね」

真白を見るとばつの悪そうに、美鶴と田をあわそつとはしなかつた。

「それ、いつ頃あるの？」

「次にあるのは新年があけてすぐ、元日の田です」

「今年はこの地でやるのですよ。雪村の家で、皆様お迎えするようです」

考えるだけでなんだか気が重くなつてきた。

人々人付き合いが得意ではない美鶴にとっては、大勢の人人が集まる

ような行事は苦手なのだ。

重くため息をつく美鶴を見て、真白は必死に話しかけてくる。

「す、すまなかつた。もつと前に言つておけばよかつた」

「ち、違つよ。大丈夫。急でちょっと驚いただけ」

「……怒つていなか?」

「怒らないよ、驚いただけだつてば」

美鶴がそつ言つと、真白は安堵の笑みを見せた。

一通り、話をしたが結果はあまり変わらなかつた。  
皆大したことは分からなかつたようだ。  
もつとも、十分に調べることはできなかつたが。

「また後日、調べに行けばいい」

真白は優しくそう言つてくれる。  
鏡と椎も同調して頷いてくれる。

美鶴はそれを嬉しく思つと同時に、申し訳ないとも思つた。

「そついえば、外、雪積もつてますよ

椎が窓に張り付いて外を眺めている。  
いつのまにか、雪が降つてきていたようだ。  
何気なく真白を見ると、特に表情はなかつた。

「……?」

美鶴の視線に気がついたのか眞白が田を合わせ、視線が絡む。恥ずかしくなり、美鶴はすぐ田をそらしてしまった。

目をそらしてしまい余計に気まずくなるのは言つまでもない。眞白はますます頭に疑問符を浮かべ、美鶴から田を離す。

「いいでしょ 鏡のばか！」

「いい加減にしろー遊びたいのなら一人でいつてくれればいいだろー！」

「一人じゃつまらないから言つてゐるのにーー！」

椎の不機嫌な声と鏡の発する半ば諦めともとれる怒声に氣づいて、二人を見る。

拗ねて頬をふくらます椎と鏡は同時に他方を向く。双子というだけあってシンクロしているようだ。

「見苦しい」ところを、すみません

頭を垂れて謝る鏡。

美鶴は鏡に顔を上げてと頼み、事情を聞く。

何となく、この兄妹でも喧嘩をするのかと驚いた。

「雪ですよー積もったから外行きたいって言つたのに鏡が

「だから遊びたいのなら……」

「みんなで行つたほうが楽しいに決まつてるよー」

また、言い争いが始まつてしまつ。

不思議と止める気がなかつたのは、真白が眠そろじしていたからかもしぬれない。

「構わない。行こうか」

その真白が呟いた。

瞬間に喧嘩がぴたりと収まる。

「美鶴も、いい？」

「私は別にいいけど……」

椎のほうを見ると田を潤ませ、真白を見ていた。

鏡は呆気にとられたような顔を一瞬見せて、真白と美鶴を見る。

「すみません……」

再び頭を下げる鏡と大喜びな椎。

そんな二人を見て、真白と美鶴は顔を見合わせ苦笑した。

「薄暗い中での雪もきれいなのは知つてた」

言葉とともに白い息。

美鶴は誰に言つてもなくそつまつ。

その言葉を聞いた真白が隣に並び、同調し首を縦に一回振る。

隣の温かい存在に気づき、斜め上を見上げる。

真白は子供を見守るような田で鏡と椎を見ていた。

(無邪気だなあ……)

乗り気ではないと思われた鏡が意外にも楽しそうに、雪遊びに興じていた。

彼はまだまだ子供だからだらり。

「ん」

真白が何か思い立つたように声を発する。そして美鶴の前に手を差し出す。

「手。美鶴は手袋をしてないから寒い」

擦って温めていた手が真白の手に包まれる。相変わらず冷たいから、意味はない。けれど何故か無性に嬉しかった。

「真白も手、冷たいね」

「……次からは、手袋をする」

決心したのか、真白は頷きながら言つ。雪に刻まれていく4つの足跡。

白銀色の雪は、微かに輝いているよつと見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9227f/>

---

雪神と少女

2010年10月28日07時24分発行